

宇輝人

飽くなき挑戦心は情熱に、
そして感謝へ



川端 貴美可 Kawabata Kimika

昭和42年生まれ。熊本市出身、豊野町在住。55年泉ヶ丘小卒。58年湖東中卒。61年済々覺高卒。63年九州女学院短期大卒。平成元年同校研究課程修了。小学校で水泳部、中学・高校では軟式テニス部に所属。19歳でウインドサーフィンを始め、24歳の時に世界選手権で4位入賞。現在は松橋小学校で教壇に立つ。

セーリング成年女子ウインドサーフィン(ウインド)級の川端貴美可選手52歳。彼女は、かつて世界選手権で4位に入ったほどの実力者。
「今でも好きなことを続けられていることに感謝しています。」
子育てで一時は海から離れたが、39歳から13年間国体レースに挑み続けている。

川端物語 前編 ―日本一へ―

競技を始めたのは学生時代。元々海が好きだった彼女。ヨットを始めようと入部説明会へ向かっていた途中、偶然出会った友人からウインドを勧められ、先にそちらの試乗会へ。初挑戦ではあったが、風に乗り沖へ向けて走ることができた。

「自然の風を受け、海面をスーッと進む感覚にはまったんです。」
何とも言えぬ快感に、その場で入部を決めた。

競技を始めて1カ月ほどたったある日、コーチに「目標は？」と聞かれ、とっさに「九州チャンピオンになりたいです。」と答えた。思い切ったことを言ったかな…そう思っていたが、「そんならいか。まあよか。しばらく考えてみる。」と返ってきた。サークル活動として楽しくやる

という選択肢もあったが、どちらかと言えば…いや、どちらかと言わなくても体育会系。小学生から部活動で鍛えた根性と負けん気が彼女のアスリート魂に火をつけた。それから数日…。「目標は日本一です。」コーチの前に、はっきりと宣言した。
その日からウインドどっぶりの毎日が始まる。夏休みには足の裏まで真っ黒?になるほど太田尾海岸に通い、海へ出た。授業中も隙を見てはスクワット。電車ではつり革も持たずにつま先立ち。バランス感覚を鍛えた。何よりもウインドを優先し、誰にも負けない練習量から自信もつき始めていた。

すると、競技を始めて半年で九州学生選手権で新人賞を獲得。8カ月目には九州1位に輝く。3年目には全日本学生選手権、全日本ウインドサーファークラス選手権、全日本オープン選手権と全日本と冠の付く3大会で優勝。スポンサーが次々とつく程に頭角を現した。夢だった教職員になって3年目の24歳には日の丸を背負い、シンガポールで開催された世界選手権で4位となった。

川端物語 後編 ―感謝の気持ち―

結婚、長男出産などではばらく第

一線から退いたが、「もう一度海へ出たい」という思いが再び彼女を突き動かした。しかし、復帰してからは葛藤が続く。家庭と仕事を持ちながらの挑戦。膨らむ闘争心とは裏腹に限られる練習時間。周囲からの期待と自分自身へのプレッシャー。そのような中、36歳で国体に初挑戦。得意だったはずの強風にたたきめされた――。

長女を出産後、39歳で2度目の国体にチャレンジ。懐かしい顔ぶれや「頑張れ熊本」の声援にパワーをもたらした。

同年齢の良きライバル、鍊石恵子さん(埼玉県)は「国体で知り合ってからもう10年以上。今ではお互い最年長で、体力面は技術でカバーしていますね。彼女の存在が私を後押ししてくれます。」と話す。

「長年競技を続ける間に、勝ちたいという気持ちは感謝へと少しずつ変化していきました。家族や仲間の存在が大きいですね。これまで関わってくれた全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。後は、どこまでやれるか…。できる範囲でやるだけです。これまでの恩返しも含めて自分のできることを探っていきたいです。」

海を映す彼女の瞳は輝いていた。



済々覺高 S61会の仲間と熊本復興祈念富士登山



24歳 世界選手権 各国の選手たちと(シンガポール)



2019茨城国体 九州チームの仲間と



長女手作りの半世紀記念のお守り



21歳 全日本オープンで優勝(沖縄県)



20歳 全日本選手権(石川県)



2012ぎふ清流国体